

創価大学 人間学科 開設記念講演会

## 私と歴史学

章 開沅

華中師範大学元学長

日時：2007年4月3日（火）午後1時

会場：A128・A129教室

尊敬する諸先生，学生の皆様，こんにちは。私は若い学生諸君を拝見するとすぐに興奮してしまいます。ある友人の私についての笑い話ですが，「章開沅先生は学生と会うことは出来ませんね。もし会ったとしたらすぐに興奮してしまうから」というのです。しかし，今日は皆さんご心配なく。今日は妻が傍におりますから興奮しません。

さきほど，創価女子短期大学から妻に《最光栄誉賞》を賜りました。この賞は彼女自身にとりましても，また私の家族，我が大学にとりましても，大変大きな励みになりました。この場をお借りして妻と私自身と家族から，また華中師範大学を代表いたしまして，池田大作先生，並びに創価大学山本学長，創価女子短期大学福島学長，教職員の皆様，そしてご列席の学生の皆様に深く感謝申し上げます。

それでは，講演を始めさせていただきます。まず始めに，どういう理由で，私が創価大学を訪問することになったかということをお話ししたいと思います。それはある一冊の書物のおかげなのです。その本とは，池田先生とイギリスの歴史学者トインビー博士との対談『二十一世紀への対話』であり，中国語版では『展望二十一世紀』という1985年に出版された本です。トインビー

一博士は、私がちょうど皆様と同じ年齢の大学生の頃から、心から尊敬している歴史の「大師」であります。ですから、私が1985年に中国版のトインビー博士と池田先生との対談集を読みました時に、池田先生はトインビー博士と対談をされるほどの方なのだからきっと実に素晴らしい学者に違いないと思いました。そのときは、私は池田先生は大変ご高齢の方だと思っていましたが、実際には、池田先生はトインビー博士の約半分の年齢であり、しかも私より2歳お若かったのです。

さて、この対談についてですが、お二人の対談内容は非常に先見性があります。皆さん考えてみて下さい。すでに前世紀の70年代に、お二人は人類、環境、平和に関する多くの大変重要な課題について、つまり現在私達が解決を願う、また本来解決しなければならない多くの課題について提起されているのです。そして提起しただけではなく、大変多くの非常に重要な意見を提案されています。これらの意見は現在もなお、有用なものであります。

2005年、池田先生は私を日本にお招き下さり、会見して下さいました。私は大変喜ばしい気持ちで池田先生にお目にかかりました。そして思いがけず、池田先生から「さあ対談を始めましょう」とのご提案をいただき、私達の対談が始まりました。2年前のことですが、まるで今日の出来事のように感じております。それから多くのご友人の皆様方のご助力をいただき、特に第三文明社のご尽力により、対談「人間勝利の世紀をめざして——『歴史』と『文化』と『教育』を語る」の第1章が最近完成致しました。中国に「老王売瓜、自売自誇（自画自賛する）」という諺があります。私は老王ではございませんが、本日のこの機会をお借りして、皆様にぜひこの対談を読んで頂きたいと推薦させていただきます。第1章は、明年（2008）1月に『第三文明』に掲載されます。

この章では池田先生と私の幼年時代、少年時代、学生時代における大変によく似通った経歴と人生観が語られております。私がこの原稿を読んで、大変驚き気付いた事は、池田先生はこんなにも多く私と似通った経歴をお持ちなのか、ということです。私達はいずれも商人の家に生まれており、私の生

家は工場経営者、池田先生の生家は商人です。しかし、戦争や家庭の事情などによって、私達はいずれも家庭の富貴と栄華の恩恵を授からなかったのです。それどころか反対に、あっという間に貧しい社会の底辺に落ちてしまったのです。これらは本当のことです。しかも私達はともに身体が非常に弱く、大人達は私を見て、「この子は本当に身体が良くない。20歳まで生きられるかどうか分からない」と大変心配しました。池田先生はおそらく私よりもっと病弱だったのでしょうか。ですから先生のご両親は、「13歳まで生きられるかどうか」とご心配なさいました。

また、私達はともに大変辛酸を舐め、苦勞をしました。池田先生は印刷会社で労働者として働き、私は四川省の長江の上流で、危険な木造船の上で働きました。池田先生は正規の大学で学ばれてはいません。ですから、先生は自ら「私は戸田大学を卒業しました」と述べられています。池田先生は戸田先生という個人を通じて、師弟関係、あらゆる学問、そして生涯にわたる学問と人間の基礎を学び、築いて来られました。私も同じく、設備の整った正規の大学で学んではおりません。なぜなら、私は常に旧社会制度に対して抵抗していたために、いつも懲罰を受けていたからです。私は中学からずっと高校三年生までそうした態度であったため、とうとう高校三年生の時に退学処分を受けました。ですから卒業証書もありません。そして新たに会計を学ぶ専門学校に入り直しました。しかし一年も経たないうちにまた除籍処分となってしまいました。ですから専門学校の卒業証書もありません。最後に難関の大学に入りましたが、解放区に行って闘っておりましたので大学の卒業証書もありません。私がこれまでに受け取った正式な卒業証書は、小学校の卒業証書だけです。このようなわけで私は皆様に、池田先生との対談の第一章をぜひお読みいただきたいのです。貧しい病弱な二人の子供であったそのお一人の池田先生は、今やこのような偉大な人物になられたのです。

昨日参加させていただいた第37回入学式における池田先生のスピーチは精神力とエネルギーに満ち溢れていました。私は大変感動いたしました。私は池田先生ほどの大きな業績はございませんが、見てのとおり大変元気にして

(14)

おります。しかも今、私は池田先生とともに、世界平和を推進し、更に素晴らしい人類文明を打ち立てるために奮闘しております。皆様はきっと私達の経験に鼓舞、啓発されることがあるはずです。私は皆さんが大変羨ましい。今日ご列席の皆さん一人一人の顔を拝見すると、当時の私達よりもずっと健康でたくましく、また大変美しく綺麗であられる。しかもまた、こんなにも素晴らしい大学で教育を受け、こんなにも素晴らしい創立者、学長、先生や先輩が皆様に関心を持たれ、大切に育み、導いてくださっている。私はご列席のすべての方々が、必ずや私より、私達より更に大きな業績を残すにちがいないと確信しております。

私と池田先生の共通点はじつに多いのです。そのことに池田先生も私も感慨を覚えております。例えば、池田先生は侵略戦争に反対されましたが、私も侵略戦争に反対をいたしました。池田先生も私も戦争を経験いたしました。しかし池田先生も私も戦闘はしておりません。もし本当に戦闘を経験していれば、私達は戦場であいまみえていたかもしれません。しかし、幸いにも私達は互いに出会ってから、この創価大学の太陽の光が美しく輝きわたる平和な環境のもとで、人類の抱える大変多くの重大な問題についてお互いに語り合いました。

私は今日はこれ以上対談の解説はいたしません。もし解説しましたら、皆様は私達の対談の第一章をご覧にならないでしょうか、ここまでにしておきます（笑）。

さて、今日はもう一点お話しさせていただきます。これからお話しいたしますのは、歴史を学ぶ意義についてです。と申しますのも、先ほど石神文学部長が述べられましたように、皆さんはこれから人間学科の学生となりますので、この点についてお話しさせていただきたいのです。現在、中国やその他の国や地域でも、人文学科はある意味において、勢力を弱めています。つまり人気が無くなってきているという事実があります。その大変重要な原因の一つとして、工業革命以来経済発展の時代に入り、とりわけ現在は情報化時代をむかえ、“科学技術を重んじ、人文を軽んじ、物質を重んじ、精神を

軽んずる”という、全人類文明が根深く、救いようの無い頑固な病気にかかってしまったということです。近代化は人類文明に対して新たな成長・発展のピークをもたらさしはしましたが、一方で近代化はまた深刻な結果をもたらしました。つまり人文科学を軽視した結果、人間関係に限らず、人と環境、人と地球、人と宇宙との関係においても大変深刻な多くの問題が起こっています。この点については19世紀末から20世紀初頭にかけて、すでに東洋、西洋の一部の歴史学者によって問題提起されています。とりわけ第一次世界大戦以降は西洋の学者がこの問題に対してさらに強い関心を寄せております。

しかしながらこの問題はいまだに解決されていません。科学技術はますます急速に発展を遂げていますが、科学技術もいまだ人類に対して完全なる幸福をもたらしてはおりません。戦争は、世界的な戦争であれ、地域的な戦争であれ、冷戦であれ、現在もなお続いています。全人類はまだ「太平（平和）」を得ておりません。しかも資源の浪費による環境汚染、人々の精神世界の墮落、犯罪者の増加、物価のさらなる上昇など、これら一連の問題によって、私達はより冷酷な現実と直面せざるを得ません。すなわち、人類文明の病は治癒するどころか、ますますひどくなるばかりです。

産業革命以来およそ300年、人々は自然改造や自然利用の面で大きな成果を得ました。しかし人々はその過程において、いかに自身を変革し、自己形成するかということを忘れ、なおざりにしてきました。このような状況が生まれたということは、つまり物質文明の高度な成長・発展の一方で、人類の精神的世界はどんどん墮落してしまったということです。人間関係はますます憂うべきものとなり、人間と自然との関係もますます悪化しております。この問題をとりあげることについて私は多言を要しません。私はある広告を見たことがあります。この広告には一滴の水が描かれており、キャッチフレーズは「地球最後の一滴の水、それはおそらく人間の涙かもしれない」というものです。

現在多くの人々は、当面の社会の安定や人々の生活の豊かさには関心はあるが、私達全人類の生存する地球がどのようなになってしまうかという問題には

(16)

考えおよんでいません。私達が次の世代に何を残せるのか、また次の世代がどのように私達の世代を評価するだろうかということも考えておりません。ゆえに私達歴史学者と本年新たに開設された人間学科に学ぶ皆さんには、ともどもに共通の責任があります。つまり人々が忘れ去った、自己形成、自己変革するということを再び蘇らせ、人間性を豊かにするということを蘇らせるのです。

昨日の入学式から本日のこの集まりでも、私は皆様方の眼差しを見ていて、創大生は大変優秀であるということがわかりました。皆様方はこのような深刻な問題に大変関心を持っておられます。以前、あるところで青少年にこれらの問題を話しましたが、全く理解できない、または全く無関心であるという反応でした。人類はまさに自身で自らを破壊しているのです。問題は本当に大変深刻な状況にあります。

創価大学には素晴らしい建学の理念があり、女子短大にも素晴らしい理念と人材がおられることを知っております。創価大学は一貫して学問をしっかりと学ぶだけではなく、人間形成の重要性を提唱されています。私は現在、学生が自身の人間形成をするだけでなく、いかにして当面の深刻な人類文明の過ちを救うかということを実際に思考しております。それゆえ、私は池田先生と同様、ご列席の若い学生の皆さんに大きな期待を寄せているのです。皆さんがこの得難い学生時代にしっかりと勉強をされ、しっかりと身体と精神、そして人格と能力に至るまで、総合的に自己を鍛錬されますようお願いしております。

中国に「少壮不努力，老大徒傷悲（若い時に努力しないと、年老いてからいたずらに悲嘆にくれるだけである）」という諺があります。私は皆様が年老いた時に、悲嘆に暮れることなく、喜びに溢れ、常に健康で、池田先生と同じように、あるいは私のように、壮健な身体で、八十歳になっても人類に対してさらに少しでも貢献していけるようになっていただきたいと願っております。皆さん！ 自信はありますか？（学生全員が「はい！」と返答）。本日は大変にありがとうございました。